

氏名	三原 鉄平
授与した学位	博士
専攻分野の名称	保健福祉学
学位授与番号	博甲第110号
学位授与の日付	平成28年9月23日
学位論文の題目	在宅高齢者のカート使用関連ストレスに関する基礎研究
学位審査委員会	主査 村社 卓 副査 山口三重子 副査 山下広美 副査 中村 光 副査 近藤理恵

学位論文内容の要旨

本学位論文は、地域在住の高齢者の QOL の維持・向上に資する安全で機能性に優れたカート開発に役に立つ基礎資料を得ることをねらいとして、高齢者がカートを使用する際に遭遇する Hassles が彼らの外出頻度ならびに QOL に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

第1章では、研究の社会的背景として、健康概念の歴史的方向性とそれに伴う福祉政策の転換を基礎に、地域包括ケアシステムの特徴と課題によって、高齢者本人の自立が一層促されることに言及した。また高齢者の外出頻度の低下要因について、国際生活機能分類 (ICF) モデルを基礎に、特に物的環境と外出頻度の関係についての課題を述べた。さらに高齢者の歩行補助具の現状について整理し、従来の介護保険制度やそれを起点としていた福祉用具開発では、実態との齟齬が急速に広がっていくことを指摘した。

第2章では、研究の学術的背景として、先ず歩行補助車に関する規格や用語の確認を行い、本研究における歩行補助車 (=カート) の概念を定義した。また高齢者のカート使用に関連する研究動向について整理し、その蓄積の不足と偏りについて言及した。さらに本研究の理論的基礎として、Lazarus らのストレス認知理論を紐解き、カートを使用する高齢者と外出頻度の関係に援用した場合の理論と仮説の関係を述べた。

第3章では、本研究の社会的・学術的背景から導かれる研究目的と、理論を基礎に仮定した因果関係モデルについて明示し、本研究枠組みにおける課題として、第一に、カート関連 Hassles とカート使用に伴う否定的感情を測定する尺度を開発すること、第二に、カート関連 Hassles がそれに対する否定的感情を経由して外出頻度ならびに QOL に影響するといった因果関係モデルを実証的に検討することとした。

第4章では、課題を達成するために行った質問紙調査の調査方法、調査項目、解析方法、調査結果を明示した。調査は2013年1月から3月までの約3ヶ月間、A県内61箇所の地域包括支援センターを利用する65歳以上のカートを使用している高齢者219人を対象に実施した。回収された調査票のうち、性、年齢等のすべての項目に欠損値を有

さない 204 人のデータを集計対象とした。統計解析の結果、第一に、カート関連 Hassles とカート使用に伴う否定的感情を測定する尺度を開発できた。測定尺度の開発においては、探索的因子分析により内容的妥当性を検討した。抽出できた因子は、「カート使用に関する心理的負担」「不安定性」「保管・収納の難しさ」「操作の難しさ」「座りにくさ」の 5 つであった。ふたつの測定尺度において、探索的因子分析で抽出できた 5 因子を第一次因子、カート使用に伴う否定的感情を二次因子とする二次因子構造モデルのデータへの適合性を構造方程式モデリングで検討した。因子構造モデルの側面からみた構成概念妥当性は統計学的に支持された。第二に、カート関連 Hassles がそれに対する否定的感情を経由して外出頻度ならびに QOL に影響するといった因果関係モデルが、データに適合することを示した。

第 5 章では、調査結果の解釈について考察を展開した。第一に、本研究で開発した「カート関連 Hassles 尺度」及び「カート使用に伴う否定的感情尺度」は、因子構造の側面からみた構成概念妥当性と内的整合性（信頼性）を兼ね備えた測定尺度であると見なすことができる。カートに関する従来の研究を概括するなら、カートの「安定性」や「操作性」に着目した研究はなされているが、「保管・収納の難しさ」や「座りにくさ」に関連した研究はほとんどなされていない。また、「カート使用に関する心理的負担」に関しては従来の研究ではほとんど指摘されていない重要なポイントである。第二に、本研究の結果は、カート関連 Hassles がそれに対する否定的感情を経由して外出頻度ならびに QOL に影響するといった因果関係モデルが、データに適合することを示していた。このことは、「カート関連 Hassles」をストレッサー、「カート使用に伴う否定的感情」をストレス認知、「外出頻度」をコーピングと置き換えるとストレス認知理論が、さらに外出頻度と QOL との関係に着目するなら活動理論が、それぞれ実証的に検証されたことを意味している。また本研究の結果は、視点を変えると、カート使用が高齢者の外出頻度に影響を及ぼすこと、すなわち彼らの「閉じこもり」を誘発するリスクのひとつになる可能性が高いことを示唆している。

第 6 章では、総合考察について述べた。本研究を通じて得られた主要な結果を総括すると共に問題点を指摘し、今後の取り組むべき課題についても述べている。

主業績

No.1	
論文題目	Effects of hassles related to wheeled walking aid use on frequency of outings and quality of life among the elderly living at home
著者名	T.Mihara, M.Kirino, T. Murakoso, J. S. Park, T.Okuno, K.Nakajima
発表誌名	日本保健科学学会誌 第18巻第4号210-222頁 2016年3月

副業績

No.1	
論文題目	カート使用の高齢者が経験する移動バリアに関する認知的評価尺度の開発
著者名	三原鉄平 奥野秀忠 出井涼介 桐野匡史 村社卓 中嶋和夫
発表誌名	岡山県立大学デザイン学部紀要 第20巻第1号9-16頁 2014年3月

関連業績

No.1	
論文題目	在宅高齢者からみた地域生活環境状態と地域生活環境満足度の関連
著者名	出井涼介 三原鉄平 實金栄 桐野匡史 中嶋和夫 村社卓
発表誌名	社会福祉学 第56巻第2号75-87頁 2015年8月

論文審査結果の要旨

本論文は、地域在住の高齢者のQOLの維持・向上に資する安全で機能性に優れたカート開発に役立つ基礎資料を得るため、高齢者がカートを使用する際に遭遇するHassles（煩わしい出来事）が高齢者の外出頻度ならびにQOLに及ぼす影響についてまとめたものである。この課題を達成するため、A県内61か所の地域包括支援センターを利用する65歳以上のカートを使用している高齢者219人を対象に、質問紙調査を実施している。統計解析の結果、得られた成果は次のとおりである。

本論文では第一に、本研究で開発した「カート関連Hassles尺度」及び「カート使用に伴う否定的感情尺度」が、因子構造の側面からみた構成概念妥当性と内的整合性（信頼性）を兼ね備えた測定尺度であることを示している。カートに関する従来の研究では、カートの「安定性」や「操作性」に着目した研究はあっても、「保管・収納の難しさ」や「座りにくさ」に関連した研究はほとんどなされていない。また、「カート使用に関する心理的負担」に関しては、従来の研究ではほとんど指摘されていない重要なポイントである。

第二に、カート使用関連Hasslesがそれに対する否定的感情を経由して外出頻度ならびに高齢者のQOLに影響するといった因果関係モデルが、データに適合することを実証的に示している。このことは、「カート関連Hassles」をストレスサー、「カート使用に伴う否定的感情」をストレス認知、「外出頻度」をコーピングと置き換えるとストレス認知理論が、さらに外出頻度とQOLとの関係に着目するならば活動理論が、それぞれ実証的に検証されたことを意味している。したがって、本研究の結果は、今後の高齢者用カート開発において具体的な資料を提供するものである。また、カート使用が高齢者の外出頻度に影響を及ぼすこと、すなわち高齢者の「閉じこもり」を誘発するリスクのひとつになる可能性が高いことを示唆するものである。

以上の結果より、本論文の成果は、学術上、実際上ともに保健福祉学分野の発展に寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（保健福祉学）の学位論文として価値あるものと認める。